



山内絵美莉さん(23)=トンコリ(五弦琴)奏者、保育教諭

——イランカラパテ（こんにちは）。胆振管内白老町で出身でしたね。

はい。中学まで白老で、高校は苫小牧でした。

——トンコリを覚えたのは小学生の時、今は講座を開くこともあるとか。

たしか4年生の時ですね。楽器はムックリしか知らなかったんで、やってみたくて。週に1回くらいの練習でしたが、楽しくて、両親にたのんで私のトンコリを用意してもらいました。5年生の時に白老町でアイヌ文化フェスティバルがあって、声をかけてもらい演奏しました。同じクラスにやってみたいという子がいて、2人で。母が大急ぎで2人分の衣装を用意してくれました。両親はこういうことをやると、すぐご応援してくれました。

——ご自身もアイヌ民族ということば、いつからご存じでしたか。

実は最近まで知らなかったんです！ 今年あるきっかけで親に聞いて「やっぱりねー、そうかなーと思ってた」とい

このコーナーでは、さまざまなお仕事をされているアイヌの方にインタビューします。

■マチコロ
アイヌ文化にはたくさんのアクセサリーがあるのを知っていますか？ おしゃれが好きなこともあり、いろいろなものを身に着けます。アイヌ語ではマチコロとい、女性の宝と呼ばれていました。たとえば伝統的なものではニナカリ（ピアス）、レクトウンベやタマサイ（首かざり）、テクンカニ（首飾り）やアシケバトゥンカニ（指輪）などがあります。タ

タンベエエラムマイン？
「きみ、これ知ってる？」の意味
マサイは大きな金属製のものがついたネックレスのような形をしていて、レクトウンベはチョーカーのような形をしています。ニナカリやアシケバトゥンカニは、昔は男性も身に付けていました。マチコロはフチウレンベ（女性の一族を守る神）ともいって、母から子へと受けつがれるお守りのような役目も果たしました。（岩谷美咲・札幌大学ウレシバクラブ2年生）

村長のおくさんが持っていた宝の箱。貧しい若者がぬすみ出そうとする



村長はおくさんに向かって「貧乏な若者がいたずらしたのであなたがはずかしい思いをさせられたが、迷わずにあの世へ行ってほしい」とおのりをしました。みなが帰ろうとする、村長は「この若者を私の家において家の手伝いをさせようと思うが反対か」とたずねました。村人は「いいですとも。悪事を手伝わす知らせにきた心の良い者ですから」と言いながら帰っていきま

ら水くみもまきとりも覚えしました。山に行く、と山の神様に「私の息子です」と言っている、仕掛け弓をかけるときは「これは息子の弓です」と言いながら仕掛けました。私の弓のほうがたくさんのものがかり、村長は「何をやるでも、息子が覚えてるのはうれいものだ」と喜びました。私は村長を父と呼び、よく働きました。結婚をし、子供も生まれ孫も生まれました。子供たちに「私は貧しく生まれ、父も母もなく人をうつらやんでいたが悪いことはしなかったのだ、村長が育ててくれたこのような暮らしになつた。良い心を持ち、先祖を大切にするように」と言い残しました。

か 欠かせないご先祖へのお供え

今回は、少し怪談めいたお話。みなさんはおほんにお墓参りをしたでしょうか。私はアイヌ式と和式のお参りをしました。アイヌ民族も今はお墓参りをしますが、かつてはお墓は不吉な場所として、お葬式の後には近づきませんでした。といつても、もちろん亡くなった人へのお供えはします。家の裏にのりをする場所があって、そこでご先祖へのお供えをするのです。亡くなった人は、死後の世界へ行って生前と同じ暮らしを続けます。食べ物や子孫から送られるお供え物がたよりです。だからお供えを欠かしてはいけません。食べ物だけでなく、生前に大切にしていたものも、お墓に入れたり燃やしたりして、あの世へ送り届けることができます。お話では、あの世へ持たせようとした宝物を貧しい若者が横取りしようとした。しかし貧しさに負けず、ぬすみを手伝わなかった主人公は、村長の子になり幸せになったのです。

墓あらし ＝日高管内平取町ペナコリの話 (国立国語研究所「アイヌ語口承文芸コーパス」より)

私は村の下手に住む貧しい若者でした。村の上手にも貧しい若者がいました。ある時、村長のおくさんが亡くなったと聞きました。そのおくさんは、マチコロ（女性の宝）アクセサリ（立派な箱）を持っていました。村長は「うちには子供がいないのでこれを受けつがせることもできないし、私が持っても仕方ない」と言いつつ、おくさんのお墓にその宝箱をいっしょにうめたという話でした。すると、村の上手の貧しい若者がやってきて「村長は墓に宝物をうめたらしい。それをほり出そう。マチコロを持っていれば、おれたちのような貧乏人でもおよめさんくらいはもらえるだろう。いっしょに来い」と私をさそいました。お墓をほるだなんて、聞いただけでもおそろしい。私は「おそろしい、マチコロも欲しくない」と断りました。それでも上手の若者は聞き入れず「そばで見えてくれればいから。宝物が手に入ったら分けてやるから」といっしょにくるもので、しづしづいといくことにしました。途中何度も「マチコロなど欲しくないから」と言いましたがとりあってくれません。やがて墓に着き、本当に墓をほり始めたので、おそろおそろ遠くから見ていました。



自分の子になるようすすめる村長。若者は初めて普通の喜らしができた

上手の若者が夢中で墓をほっていると、急に墓の中からだきつかれました。死んだはずの村長のおくさんが動き始めたのです。上手の若者はだきつかれたままにげ出せず「助けてくれ！」とさけび声をあげますが、私はおそろしさのあまり動くこともできません。するとさわぎを聞きつけて、村の家々にあかりがつきはじめました。村長の家にもあかりがついたので、このままかくしていることもできないと思ひ、ふるえながら村長の家に行きました。ありのままを話すと、村長はおこりながら「いろりのそばへ座れ！」と言いました。どうなるのだろうと思ひながらいろりのそばに行くと、なんと食事を作って私に食べさせてくれました。それから外へ出て、村中に声をかけました。そして墓へ行く、と村の全員で列を作り、刀やつえを持って大きな声でおまじないのさけび声をあげました。すると、上手の若者は墓からぬけ出すことができました。



おくさんの遺体にだきつかれ絶体絶命。村長たちは落ち着いてまじないをした